

太田道灌雄飛錄

二

L289
才



か 本 安見料
 蔵書元金申書又貸
 別見料ト受取
 書林 高橋傳吾



太田道灌雄飛錄卷之二

目錄

- 一 成氏管領上杉憲忠と不快の事
- 一 成氏憲忠を殺せり 并上杉入道道綱從倉へ寄せり
 附 太田道灌退口武勇の事
- 一 成氏上杉と和軍 并成氏と上杉より京都へ進
 附 武州府中分限お軍の事
- 一 常州小栗為城成氏下野國宇都宮の城を攻る
- 一 京都より成氏征討とて今川範忠從倉へ發向の事
 并 成氏從倉を退去軍兵小乱妨の事

太田道灌雄飛錄卷之二

元鳥井中納言雅世々
消重一もて活削の詠
草ちもに

源持資

いかにまのまゝにまゝに
国のものゝまゝに

太田道灌雄飛録卷之二

東都 木村梅年忠貞編輯

○足利成氏管領上杉憲忠と不快の事。安和の事。

其頃山内へ上杉右京亮憲忠若年いゝ。家長長尾たふ門尉能景緒事
名代とて政事を執行。又扇谷の修理長持朝より。是も持氏滅亡の
とて憲實の一味の身一とて世中をいゝ。むろろゝ。みいひ。み息
弾心少彌頭房の家督と附屬。憲忠は婿とて両家の和親を計す。
其身へ出家入道とて道朝と号す。武州河紙へ隠居。うろろ。然とて
頭房もいゝ。若年より。家臣武氏紙生のち回備中守賢清政
務を補佐。万端私のとういゝ。いゝ。うろろ。を因。長尾へ上杉家へ
はて二公あゝ。うろろ。総て安房。憲忠の提乃。うろろ。國を治る。

と云。此の人こそ頃東國参奴の者なれば。其名の都府も聞え將軍
家にもまゐりてみづからさる。中にも長尾能登兵衛上杉乃嫡家
内乃執事あるべし。彼人これと崇敬して其威風凛々する者あり。長
尾ハ三流あり。上野白井と上総佐原と。越後とあり。此の人成氏へ當時止
頭の人の結城藤田小山。小田守都宮等申あも千葉新介胤將ハ父の胤直持
氏へ不忠あり。因姓馬加陸奥守康胤を勤めたり。成氏の事をかり
参り。上杉といふは、妨げ威を振ひたる。お雄へかきくど事ハ
うい。つとなく清和と上杉の共回不快ゆゑなり。斯て後ハ
この清和より。上杉と退治の事。程あるほどに田資清。長尾能登
相繼いで上杉方へ一味同心化大谷氏お修。事のふつふなるを
此方より退治せむとて。寶徳三年未年四月廿一日。その田資清。長尾能登

西大將とて五百余騎と引率し。鎌倉の陣に入りてせり。成氏へ此由
火急を告ぐる。小折市用意の兵士も少くして防戦叶はざり。一
先此の島の方へ遁走。成氏は暫く陣をとり。是より戦ひ遅る。
安房上総へ入りて人衆を併せたり。是より謀を。成氏を回し
成氏既より陣を移し。此の傍に陣をとりて聞くと。跡と繋ぐ。
腰絨までもおきたり。成氏の陣は備へる。小山下野守高朝。い
其敵とていひ。ちうとんと。二つ巴の旗とて。七里を濱へ馳向。防ぎ
いり。敵は大勢。方へ小勢。さうとて。さる。綱南と撥ひ。さうと。家の子
郎。八十餘人付。其の。多敷。負ひ。さう。多敷。退く。
敵へ多勢。方へ。由比の濱。さう。さる。小山下野守高朝。い
く。さる。成氏。付。ちうとんと。千葉新田。將小田。保波守持。家守都宮。肥後。

守秀綱四百余騎ゆと雁のふらぐ。勝ちたるも田長尾が馬の
かより。國の聲とほりておくる。も尾能景これを見て。始の軍
をよみえん。ふと目く切崩す。米配して下妙されば早の雄乃
若者ども。真先は進んで火水よきとぞ戦ひる。市所かへ小の敗軍
の恥辱と重んと。切れども射ども物もせ。ばへ方よきとて討てられ
ば。も尾が備も色めたる。殊は小く。一筋くたう。うきりも。六勝
し。く雨の氣多う。終ふ虎只追ふ。千葉小田。宇都宮の。ものや味方
ち勝る。そ。女圖とめらる。能景と付え。と。顔と。多う。取挫け。能
人。ふ怒。達。味方の者ども。れ。敵へ小勢ぞり。う。大將。う
なれ。顔。や。ふ。人。と。大勢の靡と。ふ。一返。く
ふ。二陣。も。う。田。部。伍。へ。關。

資清へ先陣利さへ入智んと。う。の方へ。一。と。先。の兵。さ
さん。ふ。て。か。も。資清。齒。を。怒。も。如何。も。と
た。や。あ。迎。味。方。ふ。と。十。町。より。退。き。う。市。所。方。乃。三。將。と
勝軍。へ。と。も。多。全。悉。く。戦。ひ。疲。れ。へ。勢。も。あ。う。と。進。付。し
は。でも。あ。く。色。を。う。て。ゆ。り。事。や。言。う。や。み。び。り。け。日。の。軍。は
上。秋。勢。は。百。二十。餘。人。付。た。と。再。も。う。ふ。も。あ。く。相。持。續。け
し。退。く。げ。あ。よ。う。秋。意。思。も。今。度。の。一。戦。の。自。分。の。か。う。の。あ。う。と。も
後。難。も。如。何。と。思。ひ。く。も。お。お。士。沢。山。へ。ぞ。捕。ど。り。り。る。安。又。う。秋。安
房。の。道。長。棟。が。弟。と。希。重。方。の。道。道。脱。へ。先。来。安。房。の。道。と。あ。は。縁。念。と
を。返。き。彈。傍。と。う。て。な。る。か。げ。あ。う。ひ。乃。事。以。圖。て。江。の。も。山。の。市。陣。へ
を。あ。う。て。今。度。の。不。成。へ。今。く。意。思。が。達。も。あ。ひ。い。と。偏。は。家。へ。さ。る。が。止。ふ

ゆあり。ゆゑに宿免のりくゆ和乎と預ひをり。氏頻ふ休ゆ
とゆりゆり。成氏ゆも出網得あり。ゆ赦免の旨ゆふれり。諸人
ちき。暇ひ鎌倉を事し鎮するふ。いゝれ成氏より事於人けり
恒進のる其状ゆ曰

關東執務事上右京亮憲忠離居其職ゆ依爲滋若長
尾左衛門尉自專諸職令幾如公務を田備中守爲後合張中
後急逐日令傍情訓構種く造憲譯及火急ゆる安被平德忠
去月廿日疾掃居江鴨の翌廿一日爲長尾を田出張率其
寄束腰越浦救合戦之向小山ヶ野守家人救軍令討其共
後被等出由比浦ゆ如々千葉新々小田後守守都宮下爲
ゆ方殺別攻戦向山徒等被少殺相及糟谷に引退被合戦

行ゆ長棟合身通曉防爲重計果自駿及孫執中降其行
候向以寛宥々候令優免者付如余上令難流給自士伏山に
構要害之由其向次に於長尾を田以下之凶徒を速に加殺付
ゆ之被殺ゆ一件事不替時日被之被恒進の相付を其爲國爲
復合言上之令延ゆ

右京亮事自元無保簡之由上之不自由被を不便と云ふ
安意忠被官人中長尾を田を殺軍羽織小幡小宮山ヶ野殺十人
馳來書傳ゆ

- 一 安房入道候關東之通行政務之由可被治下
- 一 之廿日合戦時戦功之軍中にて被成ヶ野感之津教書ゆ
- 一 關東諸將武以上及一撥軍中にて被忠節者被津教書ゆ

不可無也

一奉對京都一切不存私曲能自今以後養三抽番二忠勤肝要
安房入道經維等情以早建三抽番被个上裁以去二畏公等
趣可然候之被裁給上之御意

又月十二日

成氏

左衛門督入道殿

かくて系族より市教書をあらへてふりて。双方和事細くく。同き八月成氏も鎌倉へ向ふありり。

○成氏上校憲忠を救を所上校持朝鎌倉へある方面道真退口武勇の事

さきの將軍家の所よりて今成氏へ不承の軍中優免あり。憲忠も和事あり。結西堂藤王院のお僧より使て下向り同成氏より一色宮内を彌範直武田右馬助信長よりよせくある。憲忠も和事あり。山内へ飯王。かくて御所へ出仕を。右内侍。長尾藤原も。免を蒙り出仕。藤原の沖より馬と獻上。これより入道。能景の國寶。資法入道真とぞ号する。かゝる憲忠入道も。鎌倉へ向ふ。さきより。さきより。伊豆國各紙の國清寺にて。陽とる。後より。伊豆國各紙の國清寺にて。圓陽國深川の大寧寺より遷化。さきより。道隆の始より。三郎重方と云ひ。中執より遁世。硯屋和尙に在る。生涯佛門の徒。

成氏恨むのたてやあるを。殊小結城等紙始め。それには憤と懐く。暗
まれに憲忠が身の上誠にも深く。深淵小隙むの患あり。とてもかゝても
始終君臣合辭の朝のそとに。一家の滅亡をあらはせんはまじき
と。毛尾へ還昌質とふし。合せ密に上野へ下り。一味の族を併ふ。と。
種々に計畧をぞめぐじり。女目以清所方。後終方とく。二つに分ち。
不快ゆゑありしゆゑ。市所方に人々い事を圖く。ひひひ。市所方に
其あり。上杉長尾等が隠謀脱は。尋常なり。少時も油断はみよ。と。味方の
一太事あるべし。と。憲忠と退治。関東を潜むべし。成氏へ勧めを
せよ。市所方も憲忠より思ふをともあれ。むの義あり。と。甚だ疑ひ
あり。在鎌倉の人々入る。一番。結城に勢を補成朝武田右馬助
信長印東式部少輔等。二百騎をとり。忍びかくし用意をなす。其不意に付



大田道隆進路巻之二



前の發願上杉安房守憲実
入道長棟舎才三郎重方
入道道悦を伴ひ伊豆此
國清寺と出て中へ赴く図

大田道隆進路巻之二

ふんと享徳三年甲戌十二月廿七日の夜半の比。上杉が宿所鎌倉西
御門の館へやまを。岡の声をひびく。憲忠の敵のあまきといひも
すべ。俄の事あてのり入兵すもまうされ。得たりやかに。と市村方
乃軍勢等。たをく。机を。入る。右系亮憲忠。金身多。那を。房顯
故大懸入道禪秀。息刑。於。少。補。憲。秋。弟。等。才。二。人。今。入。道。也。ぬ。と。り。あり。
潔く。付。た。ま。と。切。先。と。り。て。あ。て。上。防。だ。た。う。と。い。と。も。大。勢。は。丸。
巻。も。從。率。と。く。く。討。た。も。憲。忠。も。先。知。り。一。筋。く。戦。ひ。る。ま。救。た。
を。負。ひ。て。その。金。剛。を。る。る。名。自。害。せ。ん。と。す。ふ。ふ。併。が。射。り。も。あ。り。ぬ。
矢。一。つ。来。り。て。ま。甲。あ。ぞ。と。り。る。急。不。の。痛。み。り。き。れ。眼。く。ん。で。
う。ぶ。ふ。ぶ。と。休。も。是。と。見。る。より。結。城。が。弟。等。金。子。修。理。亮。氏。家。
を。身。た。二。市。あ。り。落。合。く。憲。忠。が。首。級。で。た。り。と。い。ふ。ふ。ふ。ふ。

按。ふ。金。子。氏。家。へ。其。祖。武。藏。國。村。山。堂。金。子。十。市。平。家。忠。が。二。男。
な。娘。門。尉。家。政。が。七。代。孫。の。郎。政。朝。き。で。氏。花。國。多。磨。那。金。子。の。ふ。たり。
一。が。政。朝。女。子。あり。て。男。ふ。あ。り。より。て。結。城。滿。廣。の。ふ。原。之。郎。光。家。
と。り。て。智。く。家。智。を。傳。へ。其。後。光。家。古。く。氏。家。の。結。城。へ。あ。り。と。
より。其。の。氏。家。を。始。り。て。守。屋。等。を。れ。從。ひ。け。き。結。城。の。家。
也。と。い。ふ。ふ。ふ。ふ。

抑。ふ。憲。忠。房。顯。の。あ。り。い。ふ。ふ。と。て。母。如。法。通。也。か。と。稱。え。け。り。と。傳。へ。
事。成。計。ら。ん。と。夜。小。終。ま。く。落。り。る。結。城。こ。の。人。は。憲。忠。と。一。戦。ふ。
付。え。凱。歌。を。奏。く。憲。忠。が。首。級。お。と。す。市。村。へ。あ。り。ま。り。と。い。ふ。と。あ。り。ち。
室。檢。の。ふ。と。て。用。意。と。あ。り。管。領。の。首。級。庭。上。に。置。く。と。い。ふ。と。い。ふ。と。
疊。を。敷。き。て。金。子。兄。弟。を。座。下。り。成。氏。の。將。凡。よ。て。法。の。く。と。室。檢。

とうとう秘術をそとておたふしけり。これ津所方も色めきとてぞとて
 うりる。武田信も一色より向ひ味方の志者敵の迹をかりしうりる。
 追苗の場とすうりる。苗入道は返さる。けりふよ。松本尾等
 再部伍とす。ちりちり。今までの勝軍へ徒事とありぬ。けり。
 勢より揚げ。ける。その方と休めん。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。
 同く。揚貝と吹らる。ちりちり。敵の止とる。いふ。いふ。いふ。
 けり。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。
 勢より。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。
 道より。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。
 誠へ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。

○長尾入道再勢公集む并清所方上杉方武州分配河原之

合戦の事

かくて毛尾入道へ告げめし。清所方と付する事新くべしと云ひ
 去。越後の守備職上牧房顯と云ふ大將と。越後信濃・武藏・上野
 その外・東へ・國の内よりねふる族のく。上牧八郎・藤朝・同・廳・泉・和
 六郎・同・十郎・憲・明・等と云ふ。下野・金・天・命・只・来・こ・ふ・揃・り・て。成氏退
 治れ討たれりしころ。又故大無入道が息。右馬助・憲・秋・は・又・逆・の
 と・ね・よ・あ・り・て・其・事・を・聞・く・より・い・ふ・は・い・ふ・と・殺・れ・今・な・一・族・の
 役・に・あ・り・か・つ・り・し。成氏はと聞き。敵の要害は個づつせんふら
 ち。ち。自・然・に・成・率・て・や・あ・せ。然・と・聞・き・と・あ・る・の・こ・ろ・で・遠・攻
 め・し・め・れ・糧・道・を・断・切・し・て・越・後・上・野・の・兵・士・を・一・戦・の・励・も・あ・く
 思・ひ・く・ふ・あ・り・く・も・た・も・屋・も・就・時・叶・ひ・し。成氏上野の一揆をい

驅りぬ。武州・埼玉・西へ退きて陣とある。かゝるに。成氏も下総
 高師・那古河の嶋の衆といふ屋敷と立。同國・同宿の地を。田
 河内・中・成・等・め。野田の城より野田右馬助・等・率・を・添・く・あ・る・を・さ・す
 成氏は甲斐にお援と云ふ。下総等の事をと集め。近日埼玉へ寄向し。上牧も
 尾・あ・り・付・亡・し。東國・成・平・治・見・と・其・評・級・を・な・り。世・は・又・下・総・の・千・葉
 女・亂・直・入・道・常・瑞・へ・目・に・澤・金・の・侍・所・あ・く。成氏へ度々の忠告あり。成
 氏・等・へ・故・御・衆・が・外・孫・あり。今・度・彼・が・息・憲・秋・下・向・く・と・い・ふ・を・あ・ら・わ・せ
 方の叙と一時と。忽ち殺し合はれ。成氏の敵と云ふ。なり。成氏
 あゝと上牧長尾の人々。持朝へ通す。お援して。京都お軍家へ言上し。
 佛・教・書・を・び・お・祈・を・お・か・し。成氏退治の計畧とぞわづし。成氏は
 佛・教・の・人・に・え・さ・れ・ば。成氏よりも。陽・泉・寺・西・堂・成・と・い・ふ・京・都・へ・や・ど・げ

六曰直隸經世錄卷之二

形^{かたち}り^り。す^す。所^{ところ}方^{かた}へ^へ。あ^あ日^ひの^の合^{あひ}戦^{せん}。よ^よう^うち^ち勝^{かち}。う^うん^ん。べ^べ。降^{くだ}。集^{あつ}の^の者^{もの}。救^{きう}を^を。と^と。く^く。日^ひ。不^ふ。同^{どう}。り^り。
敵^{てき}と^と。う^うち^ち亡^な。く^く。東^{とう}。國^{こく}。氏^し。結^{むす}。ん^ん。と^と。將^{しょう}。率^{そつ}。さ^さも^も。お^お。恨^{うら}。み^み。あ^あ。へ^へ。ま^ま。

○常々小栗洛城^{らくじやう}并成氏^{なりなり}宰都宮^{つみや}の城を攻る事

かゝる上杉・吉尾の敗軍の遺骸あり。幸而國小森の隙より入る。小田の
國より四月、森氏追寄あり。先づ傳へ馬をきてこれ。當國の小田。
篠田。筑波。下野の小山。下野の森。向けらる。彼城を攻る。上杉方
しも、小森の救日、合戦止む。は陣中より寄る。一方の大ね。小田の
勢を補ふ。病を。是よりして其の隙に、彼守時家、愁傷あり。軍
ても。吾等あり。とて、返る。せう。成氏、あひ。かゝる荒を、入る。大勢
あり。攻めり。より。小森の城も、攻る。小森方、悉く、破る。とて
下野へぞ、落ちる。あり。あり。とて。小森の、下野、如等、困あり。とて、あり。

さ世々も六等綱も息男明潤あ〜びよ芳賀以下の者どもも。市所あへ降る
人もいふかゞしも便きうくちゆうり入道して、まきの杖よさるを衆人奥列白川の
方へぞ流りたきふ。かゝく山川サキも雲のあけも政ちちやとていづれも
市所あへ降ると。

○成氏征伐とて、今川範忠、篠倉之強向、安し成氏、篠倉退去、附王
軍を留め、机妨のさす

享徳四年乙亥。お由良將軍義政公より。成氏征伐の事。参内あり。すまのち。當今。後花園院より。錦の御旗を賜る。御製の御宸翰あり。ら。と。や。も。ふ。海。中。雲。の。け。の。て。あ。あ。ま。の。ち。り。紙。を。ら。と。秋。風。外。小。龍。虎。を。画。さ。う。御旗二枚あり。將軍家にも御旗の旗。又。御教書紙。あり。麻王院におそく。下。る。惣。大。將。ハ。致。遠。お。州。の。さ。守。今。川。と。堀。也。



絶忠より東海道の軍勢を引率し、鎌倉へ發向と。是より先成氏の
古河より鎌倉へ帰被りし。か。か。と。今。是。非。事。と。
ありし。木戸内匠助大森山羽子。印東次郎た後門尉里見氏。松久捕等
千餘人を引率し、離山まで押出。あ。さ。る。敵。と。待。む。か。所。を。破。ら
し。い。ど。防。ご。う。い。か。皆。く。ち。負。く。べ。成。氏。又。新。軍。の。勢。二。百。餘
騎。を。引。向。け。ら。し。い。ど。も。故。老。雲。霞。の。く。車。り。な。れ。い。ど。も。級。軍
し。め。成。氏。の。府。中。を。く。く。ど。あ。り。る。此。道。を。世。々。く。い。い。と。う。め。
南。一。揆。の。い。ど。も。降。起。し。く。旗。や。し。く。待。り。け。り。結。城。中。を。方。を。捕。獲。
田。内。守。先。陣。を。う。く。ま。さ。率。を。わ。り。て。自。ら。先。よ。す。と。延。中。と。く
道。を。開。き。通。し。し。め。り。成。氏。の。あ。り。く。武。乃。葛。蒲。小。落。と。く。級。軍。の
兵。主。と。あ。り。ま。す。下。総。岡。下。河。邊。の。庄。古。河。の。城。を。ぞ。籠。ら。ま。る。これ。と

し。古。河。の。市。所。と。ま。さ。る。う。ち。ふ。今。川。が。ま。さ。る。い。鎌。倉。小。津。防。ぐ。者。も
あ。り。ま。す。い。れ。へ。く。市。所。と。ま。さ。る。谷。上。河。の。所。を。く。民。屋。と。乳。坊。
あ。り。ひ。ふ。神。社。佛。圖。と。も。追。捕。し。て。く。ま。さ。り。い。る。抑。後。金。の。右。衛。門。
下。頼。朝。卿。草。創。の。地。と。く。その。後。北。條。九。代。の。繁。栄。も。高。村。へ。道。小。さ。い。
く。も。さ。る。氏。々。の。今。成。氏。は。あ。り。く。古。代。相。續。の。財。寶。此。時。皆。を。く。ま。さ。り。
ま。さ。る。事。と。く。あ。り。く。亡。防。と。あ。り。く。田。圃。草。野。と。ま。さ。り。く。こ。ま。さ。る。
日。々。也。享。德。四。年。乙。亥。六。月。十。六。日。の。事。と。り。り。く。い。ま。さ。る。今。ふ。あ。り。く。村。老。牧。等。
の。古。河。と。ま。さ。る。人。と。迎。へ。懐。四。乃。情。と。迷。種。と。ま。さ。る。あ。り。く。い。ま。さ。る。
強。乃。の。古。河。中。の。い。ま。さ。る。呼。の。い。ま。さ。る。在。柄。天。神。の。社。禮。と。破。り。く。
解。さ。る。も。神。射。と。ま。さ。る。い。ま。さ。る。強。乃。持。り。く。く。國。の。恩。賜。と。ま。さ。る。と。り。く。
神。あ。り。く。か。ま。さ。る。い。ま。さ。る。後。神。射。と。ま。さ。る。い。ま。さ。る。在。柄。へ。出。陣。と。ま。さ。る。

て再りやの雲社と仰れまゐりける事。

太田道灌雄飛錄卷之二終

